

あなたのスキルは社会に役立つ

2011年3月11日の東日本大震災発生直後に発足したHack For Japanと「市民が主体となって自分たちの街の課題を技術で解決するコミュニティ作り支援」を掲げるCode for Japanのメンバーから、防災や減災、地域の活性化や課題解決、そして人材育成など、「エンジニアができる社会貢献」をテーマにした記事をお届けします。

第99回

地域をエンジニアリングしていくために

●一般社団法人オムスビ
森山 貴士(もりやまたかし) [Twitter](#) @Morlin1129

「地域課題に立ち向かえる人材・組織を輩出する」ことを目指し、福島県南相馬市に移住してから5年が経ちました。筆者のこれまでの活動の経緯や今後の方針を振り返ることが、地方での活動を視野に入れている方の指針や、地方のITエンジニアリングに踏み出す一歩となれば幸いです。

移住して5年。やっとスタート地点に来た感じ

筆者が前職のソフトウェアベンダーを退職して福島県南相馬市に移住したのは2014年の7月です。今住んでいるところは南相馬市の小高区という地区で、福島第一原子力発電所から北側約15kmの場所にあります。2016年に避難解除がなされ、現在は約3,700名が暮らしていますが、この人口は震災前の25%程度、また高齢者がほぼ半数となっており、地域の持続可能性が危ういと感じています。

現在は、こうした難しい状況の中で「地域課題に立ち向かえる人材・組織を輩出する」ことをミッションに一般社団法人オムスビという組織を立ち上げ、地域の人材や資源を集約するコミュニティ作りと、それを活かした地域の取り組みを行っています。

本誌を読んでいるみなさんが関心のありそうなところでいうと、地域SNSのようなものの実証実験を2019年末から始めています(写真1)。これは、地域の歯抜けになってしまったコミュニティを補完する地域イベントや、話題になる情報の発信ができるものです。加えて、買い物や移動・日常の暮らしで困ったときに周りの人を頼ったり、逆に自分ので

きることを地域に役立てたりできるようなマッチングサービスの機能も兼ね備えています。乱暴にいうと、回覧板とFacebookとUberとが合わさったようなイメージですが、高齢者もサービスを受けられる状態で地域内で回していけるようなサービスにしたいと考えています。

「やっと実証している段階って、移住してからいったい5年も何をしていたのさ」とみなさん思われるかもしれません。筆者も、前職にいたときはそれなりに有能なほうだと思っていたので、この体たらくに落ち込んだりすることもありました。

ただ、どうして自分がこのスタートラインと思える状態に立つまで時間がかかったのかを示すことで、地方の現場の難しさ・おもしろさを知ってもらい、これから地域に入っていこうとするみなさんの参考にしてもらえたらと思います。

▼写真1 地域SNSの「KANADE」開発中の画像。我が子も地域にPR



移住当初の考え

移住当初の考えとしては「高校生あたりからIT人材を育成して、ソフトウェア開発の仕事を作って、外部の人材も呼び込みながらコミュニティを構築していけば、地域に根ざしたITコミュニティ(= Hack for Minamisoma的なもの)もできるだろう」といったことを考えていました。地域で震災後に立ち上がったIT企業に関わってみたり、IT人材を育成する講座を開いてみたり、高校の授業でプログラミング講座をやらせてもらったり、ハッカソンを何回かやったりしました。おそらく、単発の企画それぞれで見れば標準以上のクオリティのアウトプットを出していたと思いますが、2年、3年経ったときにいまい結果に結び付いていないと感じるようになりました。

どうしてうまくいかないのか？

▶ 興味や素養のある人材の市外流出

まず、人材を育てていくうえで、ITを主たる生業とする企業(IT企業と総称することをお許ください)や、モラトリアムを堪能できる大学が市内にほとんどないことが障壁になりました。企業がほぼないゆえに、地域にはロールモデルになる人がほとんどいません。当然進路指導としても、プログラミングに興味がある=仙台や東京の専門学校に行っただけ、というような指導がされ、親御さんもそうするほかに方法が知らない状況です。せっかく興味のある若い人材を発掘・育成してみても、高校3年生の頭には、県外の専門学校や大学に進学したり、地域のITとはほとんど関係ない企業に就職したりすることとなり、なかなかプログラミングを学び続ける状態に定着してくれませんでした。

そうしたことが何年も続き、育てては県外へ、育てては県外へ……というのをやり続けていました。そんなこんなしている内に悪意にしていた高校の教員はおおむね3年ごとに異動になるので、そちらの

信頼関係も構築しなおして……といった状態になっていました。

▶ 自分に営業・経営能力があるわけではなかった

また、自分はソフトウェアの開発やデザイン、ビジネスモデルやマーケティングのプランニング、その教育自体は得意でしたが、営業や経営実務といったところは完全に素人でした。ビジネスをゼロから開拓して巻き込んでいくというのが、そもそもうまくありませんでした。リスクをとって未経験の人材を雇用してソフトウェア開発会社を立ち上げる……ということも考えましたが、人の人生の一部を預かってそんな賭けに出られるほどの経営・実務能力もなかったので、オムスピでの活動の継続に行き詰まりを感じるようになっていきました。

▶ ITが活用されるべき地域資源にアクセスできなかった

そもそもでいえば、自分はヨソモノでしたから、ITが活用されるべきビジネスや地域資源にアクセスできなかったこともありました。たとえば、「農家の人がセンサーやドローンを活用してIT農業をやれば、もっとおいしい食材を安定して供給できるようになって付加価値上がるよね！」みたいなことを考えたとしても、そもそも意欲的で協力的な農家さんを知らない、ということです。理論上はソフトウェアを活用することで地域の助けになることは山ほどありますが、それは地域側の受け入れ体制と信頼関係(あるいはそれを補完するお金)があつてのものでした。筆者には残念ながらそういったものがなかったため、ソフトウェアの開発ができるくらいでは「地域では何もできない」と同じでした。

そんなわけで当初の甘い考えは見事に打ち砕かれ、方針転換を迫られたのが移住から2年経った2016年の中ごろでした。

同志の出会いとオムスピの立ち上げ

そう思って悩んでいたところに、ハッカソンを開催したときに参加してくれたことがきっかけで、この地域で何かしたいという想いのある人たちと話す機

会が増えるようになりました。地域の同じくらいの世代の方々と、その中の1人が「避難指示解除がされる小高で何かしたい。自分としてはコーヒーを淹れて、地域の人が集まって話したりする場所ができないかと思っている」という趣旨の話を持ちかけてくれました。

このとき、自分としては「ITエンジニアのコミュニティがダメなら、『地域課題に取り組む』というコミュニティならもう少し柔軟性があるのでは」「自分の管轄だけでは難しいが、こうやって集まった力を使えばできるが増えるのでは」というようなことを考えました。

そして、それを実現しようと動き出し、実際にスタートしたのがキッチンカーのコーヒースタンド「Odaka Micro Stand Bar (OMSBの頭文字をとってオムスビと呼びます)」でした(写真2)。

実証から「地域課題に立ち向かえる」コミュニティづくりへ

当初の考えは「この先行きが見えない不確実な地域ではやってみないとわからない。小さく始めて検証しよう」「そういう背中を周りに見せて巻き込んで行けたらいい」というものでした。

でも、今の自分からすると、自力だけではどうしようもなく難しくてこじ開けられなかった扉が、こうやって想いを持った仲間が6、7名集まることで開くことができ、ビジョンを実際の形にできたという感触が得られました。実際にキッチンカーで営業してみると、同じような気持ちを持った地域の人たちや、支援したいと訪れてくれた市外の人たち、そう

▼写真2 駅前の空き地を借りて始めたコーヒースタンド。キッチンカーはDIYで制作



いう人たちが集まってくるようになりました。その中で、まだスーパーがないからとあおぞらマルシェをやってみたり、人が減って暗くなってしまった街だからと、コーヒーにプラスアルファ課金してもらうことでソーラーライトを増やすキャンペーンをやってみたりしていました。そういう中で、少しずつ「オムスビのやつらは一生懸命やってくれているぞ」というような空気感から、最初は怪訝(げんげん)そうな目で見ていた地域の方々も少しずつ応援してくれるようになってきました。

それでも高い継続の壁

こうしていろいろな手ごたえを感じる一方で、同時にさらに高い壁を感じることもありました。単発のイベントやキャンペーンというのは楽しいのですが、それを継続することは難しいのです。ボランティアにおけるモチベーションの維持には限界がありますし、補助金を使ったとしても無限ではありません。やはり、ビジネスとしてお金を稼ぎ、継続できるようにしていかなければ、どれほど高尚なビジョンも無意味となってしまうのです。しかし、自分にはビジネスの素養があるわけでもなく、人口がすでに減っていて半数は高齢者で……という場所で新しいビジネスを立ち上げていくのは、今の状態ではとても困難だと思い知りました。

「レベルを上げて物理で殴ればいい」を地域で実践する

筆者は今、この状況をレベル制のRPGゲームによく例えています。いきなり強力なラスボスが出てきたのに、自分たちは冒険を始めたばかり。低レベルで仲間も少なく、ろくな武器も持っていないのです。とくにこの原発被災地域は、誰も倒したことがない強敵が現れているのでおさらハードモードです。

そういうときに何をすべきか。それもRPGゲームと同じことだと筆者は考えています。仲間を集めて、倒せる敵を倒しながら訓練をしてレベルを上げて、強いスキルを身につけたり、ときにはすごい人に必殺技を授けてもらったりしながら、万全な状態

で難しい課題に挑む。そういうことが必要だと考えるとわかりやすすくないでしょうか。

レベル制のRPGで擲^て擲^りされがちな「レベルを上げて物理で殴ればいい」という状態になるまで強力になった仲間がたくさんいれば、地域の「課題」と言われているものはきっと解決できるに違いない。そう考え、その機能をオムスピが担おうということで動いています。

ITエンジニアは魔法使いみたいなもの。仲間が必要

ITエンジニアというのは魔法使いみたいなものだと思います。「十分に発達した科学技術は、魔法と見分けがつかない」なんて言葉もありますが、ほかの人が想像できないようなすごいことができる代わりに、ほかの人と連携しないことには無力です。

そう自らの考えを整理できてからは、プログラミングを教えるIT人材を育てる活動は継続しつつも、その人材と連携するための人材——農業だったり、マーケティングだったり、営業だったり、地域の人のつながりをよく知っていたり、そういう人たちが集まる場所を作ろう、という方向に舵^{かじ}取りをしています。

今、キッチンカーで始めたコーヒースタンドは実店舗を持つようになり、1年半が経ちました(写真3)。下は0歳から上は80歳まで、いろんな人が継続的に関わってくれる場所になってきています。この環境ができたことで、ようやく「自分の今持っている技術を活用すれば、この人たちのできることや能力を、地域の人たちの困りごとや豊かな暮らしの

▼写真3 店舗の風景。高校生から移住者まで、老若男女問わずさまざまな人が訪れる



実現に活かせるじゃないか」という地点にたどりつき、5年を経て実証段階にまでこぎつけたのでした。あとは結果がついてくれるといいのですが、これも初めての経験ですから、たくさん挫折しそうになりながら、一步一步進んでいくんだらうなと思っています。

地方にこそITの恩恵を受けるべきことがたくさんある

ここまで書くと、エンジニアの方々にはもしかすると「うわー、めんどくさ。地方でITとかあこがれてたけどやめとこ……」と思うかもしれません。実際、思っていたより3倍くらいはたいへんでした。

しかし、シェアリングエコノミーのようなビジネスモデルや、IoTで総称されるようなテクノロジーは、流通が不便^{あふ}だったり、ITをうまく活用できなかったりする人が溢^{あふ}れている地方の現場にこそ求められているはずなのです。だから「自分の技術をもっと社会に役立てられないか？」と自問する方がいたなら、ぜひこういう現場に足を踏み込んでみてほしいのです。

また、自分が生きてきた愛着のある場所で生活し続けられない、という苦しみを感じている高齢者の方や、本当は地元に戻りたくても自分が活躍できる場所がなくて戻れないでいる若者たち。そういう人たちもいます。今、日本中の地域がこのような状況になりつつあります。今手を出して動かなければ、もう2度とその「自分を形作ってきた愛すべき地元」を取り戻す機会が訪れないかもしれないのです。

地方にITエンジニアリングの芽を息づかせ、生活を支え、それを仕事にして志ある若者たちの活躍の場を作っていかなければ、日本の地方はもちろん、日本全体がだめになっていくと筆者は考えています。だからこそ、今このタイミングに、こうやってわざわざ本連載を読んでいるような、能力のある人たちが地方に関わってほしいと考えています。

Hack For Japanのような組織が、その舞台を提供してくれると思います。南相馬に来たくなった人は、連絡いただければご案内します。SD